

学区探訪

郷土資料より
十一号

一・二十三

（ 藪田の御田扇祭 ）

藪田の公民館の天井裏に古いみこしがしまつてあります。このみこしは昔、御田扇祭の時、額田手永の村々をねり歩いたものなのです。

御田扇祭は、毎年六月に行われた稲の虫除けの祭です。檜でできた扇をみこしに納め、のぼりや太鼓といっしょに田のあぜ道を行列でねり歩いたのです。この行列の出発点は大庄屋の神尾家でした。御田扇祭の

みこしは各手永に一つずつあり、皆その色がちがいました。額田手永のみこしは白色でした。御田扇祭は明治維新後、しばらく行われなかったのですが明治のなかばごろに再興されました。しかし明治の末にまた行われなくなり、みこしは神社内にしまわれてしまいました。

この御田扇祭は新編岡崎市史の『史料民俗』にも紹介されています。それによると朝早く出発した行列は、のぼりと紋付き袴の庄屋さんを先頭に、太鼓・みこし・花傘などが続いたそうです。

学区探訪

一・二十四
郷土資料より
十二号

（ 立葵丸本紫幕 ）

藪田の八幡宮に紫ちりめんの幕がしまつてあります。この幕について次のような話が残されているのです。

藪田村は非常に沃土であったが、寛政八年（一七九六）の大洪水によって青木川と矢作川が接する所の堤防が切れ、田畑の作土はもちろん底土まで流失してしまいました。村人は、年貢米はもちろん自分の生活にまで困ってしまい、そこで領主本多家へ

岡崎の殿様へお願いをして年貢米を取り下げてもらいました。ところが明治になり大蔵省は年貢の未納分を取りたてようとしたのです。驚いた村人は寄合をし、旧岡崎藩士明石範貞に村の困窮を説明してもらうことにしました。この明石範貞によって、年貢の未納分は取りたてられずにすみました。それ以後、村人は領主の恩を忘れないように供物をして領主を礼拝するようになりました。そこで旧領主本多子爵は立葵丸本紫幕を藪田村に下賜したというのです。今も神社に保存されています。

学区探訪

一・二十六
郷土資料より
十三号

殿様と大庄屋

藪田の大庄屋神尾家は、苗字帯刀など特権が与えられており、その紋所が通っただけで人々は控えたといわれています。また大庄屋の家へ藩主がお忍びでこっそりやってきて、懇親の意を示すこともあったそうです。そして、大庄屋の屋敷には倉があり災害に備えて米が蓄えられていました。藪田村は大庄屋のお膝元であるため、他の村より優遇され出役も少なかったといえます

立葵丸本紫幕が下賜されるきっかけとなった大洪水の時、村の人々は生活に困り江戸を始めとして他の町村へ出稼ぎに行く人もいました。村に残った老人子供は山へ行って柿を買い出してきて小売する人までいました。ですから、年貢米を取り下げてくれた領主を尊ぶ気持ちはたいへん強かったようです。毎年正月の初寄合の際には、下賜された紫ちりめんの幕を正面に飾り、酒餅を供えるしきたりになっていたそうです。殿様の前で寄合をし、お下りの酒・餅を食べたのです。

学区探訪

一・二十七
郷土資料より
十四号

今川氏の子孫

永禄三年（一五六〇）、今川義元は桶狭間の戦いで織田信長の奇襲を受けて戦死しました。そのため、それまで人質として今川家に預けられていた松平元康（後の徳川家康）は大高城から大樹寺へと逃げ帰ってきました。その時、今川一族で元康といっしょに逃げてきて大樹寺にかくまわれた者がいました。その今川某は境内の西、多宝塔のあたりに住みつきました。今川某に三

人の息子がいました。三人の名は、助兵衛、左兵衛・清兵衛。この今川三兄弟は、元康が三河統一への意志を固めたのとは反対に刀を捨て、ひそかに農民として生きていくことを決意しました。天正十七年（一五八九）、元康の家臣小栗仁右衛門から定書をもらって帰農し、市川と改姓しました。市川氏は多宝塔のあたりに住み、そこを大藪村と称していたのですが、そこが農業に適していないというので現在の大樹寺へ移転しました。大樹寺の市川姓の人たちは、今川氏の子孫といわれているのです。

学区探訪

郷土資料
一・二十八
十五号

大樹寺・新家

地名は歴史を知る重要な手がかりになります。大門学区も昭和五三年の町名変更によって古い地名が消えてしまい、歴史を語ってくれる大切な手がかりがだんだんと忘れられていきそうです。

大樹寺の旧字に古屋敷というのがあります。現在の藪田一丁目、富士スチールのあたりになります。この地名からわかるように、大樹寺西の大藪村から市川氏が最初に

移住してきたのがこの古屋敷のあたりだと考えられます。しかし宝永二年（一七〇五）大洪水によって大樹寺古屋敷は大きな被害を受けました。耕地への州入りがひどく、そのため岡崎藩の助成で州寄せをして六尺ほど高いところをつくってもらい、そこへあらためて移住しました。そこが現在の大樹寺二丁目の神社のあたりになります。旧字を柳といい、別に新家ともいいました。今もここに市川姓の方が何軒か住んでみえます。古屋敷から新家へ、地名が人々の移動を教えてくれます。

学区探訪

郷土資料
一・二十九
十六号

続・大樹寺新家

大樹寺村の旧字を調べてみると、蓮沼・池などの地名があり、洪水でなくても雨が降れば冠水被害の出やすい所であったようです。洪水も矢作川堤・青木川堤の決壊によりたびたび被害を受けています。なかでも宝永二年（一七〇五）に上大門野越の堤防が切れた大洪水の被害は大きく、村は流され田畑は全て砂で埋まり何もできなくなっていました。そこで、岡崎藩に願

を出して藩の人足によって州寄せをしてもらいました。宝永三年に屋敷三千四十八坪の縄張りができました。そして四年に六日間、五年に五日間、八年に十一日間、合計二十二日間の作業で州寄せを完了しました。ここが大樹寺新家です。旧字を柳といいました。ここでは、東北隅に氏神である天満宮をおき、南隅に蔵屋敷をおいて十七戸の屋敷割をしました。新家の道路が古い部落であるにもかかわらず、区画整理前からたて横きちんと整備されていたのは、この屋敷割のためだと考えられています。

学区探訪

郷土誌より
一・三十一
十七号

上里 観音堂縁起

上里の公民館には観音様が祭られていま
す。区画整理前、この観音様は今公民館が
ある所より少し西にあった観音堂に安置さ
れていました。この観音堂は、三河三十三
観音の第十九番札所であり、浄土宗円福寺
を本山としていました。

この観音堂には巻物に書かれた縁起が伝
わっており、文政二年と日付が書かれてい
ます。これによると、この聖観世音菩薩は

学区探訪

郷土誌より
一・三十一
十八号

上里の観音堂

上里の観音堂は、現在の公民館より少し
西、六十〜七十坪ほどの敷地に建てられて
いました。北から南向きに本堂があり、南
から北向きに三十三観音、東から西向きに
お地藏さんが置かれ、コの字形をしていて
西から入れるようになっていました。そし
て境内には、秋葉山の常夜燈もありました
このお堂は公民館ができたため移転され、
現在は岩津の公民館のところにあります。

行基の作で一刀三礼の尊像だということ
です。そしてこの観音様は、一度矢作川の
洪水で流されてしまいました。しかしある
夜、村の長に夢のお告げがあり、その所
を掘ってみると、そこから観音様を掘り出
すことができました。そこで、それ以後は
村に堂をつくり安置するようになりました。

二所額田郡上里村
御者小安堂
行基菩薩の像
浄土宗円福寺

観音堂縁起

区画整理前まで観音堂には堂守の僧侶もい
ました。

昔、この観音堂では、夏休みになると朝
食事前に子どもたちが集まり自主的な学習
会を行っていたそうです。小学校一年から
高等科の子どもまで、毎朝お堂の前で手を
合わせてから、日誌などの勉強をしました
大きい子が小さい子に教えてあげる、とい
形の学習会だったそうです。

上里下の切の観音堂に対して上の切にも
説教所があり弘法大師像が祭られ、病氣平
癒や災難除けの信仰を集めていました。

学区探訪

郷土文化のよ
二十九号

二・二

（地蔵と常夜燈）

昔、上里村は上の切・下の切に分かれていましたので、お地蔵さんも上の切・下の切に一つずつありました。上の切は説教所には、下の切は観音堂に祭られていました。今、公民館の東に西向きに二つのお地蔵さんが並べて安置してあります。子どもを抱いている大きい方のお地蔵さんが上の切に祭られていたお地蔵さんです。

上里公民館の前に常夜燈があります。こ

れは、もともと観音堂の境内にあったものですが、一時上里神社の西の一角に移転され、さらに区画整理後、現在地へと移転されました。天保三年と日付が刻みこまれています。この常夜燈のろうそくに火をつけにくいのは、子どもたちの仕事でした。交代で当番がまわってくるのですが、暗くなつてから火をつけにくいのは、子どもにとつてはこわくてつらい仕事だったそうです。当時は現在のように家はたくさんありませんし、田んぼに囲まれた中にぼつりと火がともっているのはこわかったのでしょうか。

学区探訪

郷土文化のよ
二十号

二・三

（昔の地蔵祭）

昔の上里の地蔵祭についてお年寄から次のような話を聞きました。

今の地蔵祭は子供会をやっている大人の人たちによって行われていますが、昔の地蔵祭は大人はいっさい関与せず子供たちだけで行われました。高等科二年の子を中心に、男子だけでやりました。花・ローソクなど係分担が決まっています、みんなで協力します。全員でリアカーを使って矢作川か

ら砂を運んできて祭壇を作り、年長者から順々に座ります。花たてなどの道具もみんな矢作川へ洗いにいきます。そして最年長者の中から一人リーダーが選ばれ、その選ばれたリーダーはごちそうの材料を買ってきます。そして、それをその母親が料理してみんなに食べさせるのです。夜になるとお燈明をつけ、花火合戦などもやりました。四年生以上はお堂にこもって夜明しました。上里の子が丈夫なものも子どもたちが自発的に地蔵祭をやるからだといわれています。